

子どもの虐待防止ネットワーク・あいち

News Letter

Vol. 13

2000. 1. 31

キャプナ ニュースレター

発行: 子どもの虐待防止ネットワーク・あいち 〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-4-4-404 TEL 052(232)2880 FAX 052(232)2882



表彰状

子どもの虐待防止ネットワーク・あいち殿

貴団体はこれまで表面化することの少なかった児童虐待についてその防止のためのさまざまな支援活動を続けてこられたその先駆的活動により貴団体が人権擁護に果たされた功績は誠に顕著でありますよびここに名古屋弁護士会人権賞を贈呈してその功績を讃え表彰いたします

平成十二年十二月八日

名古屋弁護士会
会長 那須國宏

昨年12月8日、CAPNAは名古屋弁護士会の人権賞を受賞しました。

社会の中で見すごされがちだった子どもの虐待防止の問題に光を当て、子どもたちの救援や社会啓発に取り組んできた4年間の活動を評価していただいたわけです。

祖父江代表は受賞のあいさつで「税金からいただいた勲章ではなく、弁護士会からいただいた賞だから何よりうれしい」とスピーチしました。

自由な民間の発想で、常に子どもの人権を最優先して、効果的なネットワークを組んでいくことが私たちのモットーです。

ミレニアムの年、12月の全国大会に向けてCAPNAはますます忙しくなります。熱いご支援をよろしくお願いします。

涙と笑いの4周年

CAPNA 4周年記念大会は、昨年10月17日、名古屋市東区のウイルあいちで行われました。ことしの重点目標である「子どもの虐待防止研究会・あいち大会」、特別非営利活動法人格の申請などについて報告があり、事務局案通り決議していただきました。今回の目玉イベントは、コラムニストのジョン・ギヤスライトさんの講演と、朗読劇「舞う雪にさっちゃんの歌が聞こえる」（作：祖父江文宏）の初演。観衆の感動を呼んだステージを、紙面で再現します。

愛と笑いとのコミュニケーション

—ジョン・ギヤスライトさん講演



感動を呼んだジョンさんの講演

ジョンさんは、スコットランドの伝統衣装でバグパイプを演奏しながら、舞台上に登場しました。ジョンさんはカナダ生まれですが、先祖はスコットランドの出身。代々、長男は「ジョン」の名前を受け継いでいるのだそうです。

陽気でやさしい人柄そのままの講演でした。「ガイジン」として日本社会で味わった体験、そして、いつのまにか自分が日本人に近づいていっていることなど、冒頭から場内は笑いの渦に包まれました。

それだけなら、単に楽しい講演ですが、ジョンさんを講師にお願いした背景には訳がありました。彼自身、今まであまりオープンにはしていなかったけれど、子ども時代にさまざまな傷つき体験をして、子どもの虐待防止に深い関心を寄せているのです。

やがて、話が子ども時代に移るにつれて、場内は笑いから涙に変わっていきました。

実のお父さんが仕事に失敗して、だんだん家庭内で暴力をふるうようになったこと。ある日、お母さんが暴力で大けがをして入院し、お父さんは逮捕されて、ジョンさんや弟、妹たちは施設に預けられたこと。施設の中で出会った、いろいろな人たちのこと…。

施設で調理をしている黒人の太ったおばさんは、ジョンさんの心のよりどころでした。ある日、ジョンさんが「神様は間違っている。もっと子どもが大きくて、ストロングだったら、大人にいじめられなくてなくてすむ。大人は口で勝てるんだから、もっと小さくて弱くなればいい」とおばさんに訴えると、彼女はジョンさんを大きな胸に抱きしめ、「ジョン、それは違うよ。私をごらん。私がこんなに大きくて力が強いのは、小さな子どもたちを守るために神様がそうしてくださったんだよ」と言ったそうです。

やがてお母さんは元気になり、再婚して、ジョンさんたちは幸せな家庭を取り戻すことができました。でもジョンさんは施設での体験を忘れず、子どもたちを守る大きくて強い人になろうと努力して

います。

ジョンさんが携わっている「メイク・ア・ウィッシュ」の活動もその一つ。末期のがんの子どもたちの夢をかなえてあげる活動で、最近では5歳の男の子の「トトロに会いたい」という夢に、仲間たちと取り組んだそうです。ジョンさんが住んでいる瀬戸市定光寺の山林を切り開いて、大きな張りぼてのトトロをつくり、男の子をその上に乗せて、ジョンさんがマイクでトトロの声を聴かせてあげたそうです。数ヵ月後、その子は天国に旅立ちました。

国際結婚をして二人の子の父親であるジョンさんは、家庭に必要不可欠なものとして「愛と笑いとコミュニケーション」を挙げました。

愛があれば、子どもたちは家族を信じたり、協力しあったりすることができる。いつも笑いがあれば、何か外で嫌なことがあったり落ち込んだりしていても元気を取り戻せる。そして、いつもいろんな話をして、理解しあっていれば、憎んだり、傷つけ合うこともない。観衆一人ひとりが、自らにとって大切なものを見つめ直す機会となりました。

ハブニングを乗り越えて 一熱演！朗読劇

登場人物は12人。いずれも黒い服装で、ステージの3ヶ所に設けられたマイク（アクティブエリア）で交互に朗読するという形式。全身を使った演技はあまりありませんが、祖父江代表や演劇仲間たちが、音響、照明をフルに活用して劇の効果を盛り上げました。

物語は、二人の女性を軸に動いていきます。一人は、若い母親。再婚相手の連れ子をつい虐待してしまい、周囲から理解されずに追い詰められていきます。

もう一人は、その母親からの電話を受けたCAPNA電話スタッフ。雪の降る日にかかってきたその電話は、なぜか雪の中にうずくまっていた悲しい少女の映像を喚起させ、やがて電話スタッフは、その少女がかつての自分だったことを思い出します。

虐待を受け、だれにも言えずに苦しんで、自分を責めてきた多くの人たち。「自分は悪くなかった、自分を好きになっていいんだ」と思えることから、心の救済が始まっていく。そして、悲しみや苦しみの連鎖を断ち切り、本来の自分を取り戻す手助けをするためにCAPNAのネットワークはあるんだ、と祖父江代表は朗読劇を通じて訴えています。

実は、この大会の前夜、CAPNA関係者を真っ青にさせるニュースが飛び込みました。主演格の電話スタッフを演じる予定だった方が急病で入院してしまったのです。

祖父江代表や出演者たちの間で、急きょ電話の打ち合わせが続きました。そして、主役に抜擢されたのは、中学校時代に演劇部の経験があるという加藤悦子さん（CAPNA広報担当）。練習不足を感じさせない堂々の演技で、大きな拍手を浴びました。もう一人の主演女優、野村由美子さんも、小さな娘の見守る前で、難しい役を力いっぱい演じました。

参加者のアンケートも絶賛の声ばかりで「もう一度みたい」と、朗読劇の再演を求める声もいくつもありました。出演者のほとんどが演劇初体験だったことを考えると、奇跡的な成功と言っていいでしょう。CAPNA劇団の将来が注目されます。



主演女優二人が熱演

栃木大会を振り返って

昨年11月に栃木県宇都宮市で開かれた第5回子どもの虐待防止研究会（JaSPCAN）栃木大会には、CAPNAから40人以上のメンバーが参加しました。今年12月にはいよいよ愛知での開催。現地を見て感じたことを今年の大会に生かしたいという思いから、みんな熱心に会場を見て回っていました。栃木の熱気と、あいち大会に向けての準備状況を水戸憲一事務局次長が報告します。

「実際は、2,000人以上の参加希望者がいたのですが、会場の都合で400人ほど断ったんです」

栃木大会の中心メンバー、早崎肇さん（栃木県中央児童相談所：臨床心理士）の話聞いて、驚かすにはいられなかった。

まだ正式な学会ではない学術研究会にもかかわらず、これだけの動員。専門家だけではなく、幅広い層の人たちが虐待問題に関心を持つようになったことが背景にあると思う。

栃木大会の重点テーマは、次の三つ。

- ① 虐待を受けた子どもたちへの援助
- ② 性的虐待への理解と対応
- ③ 虐待援助における警察との連携

その中でも特に印象に残ったのは、初日の午後に行われたシンポジウム「虐待が子どもの心に与える影響」。話題提供者として、虐待を受けた子どもたちの少年犯罪と非行の関係を丁寧なスライドを交えて紹介してくださった藤岡淳子さん（宇都宮少年



参加者でぎっしり埋まった主会場＝宇都宮市で

鑑別所：臨床心理士）の語りは痛快だった。

「虐待を受けた子は心の中に怒りを抱いています。しかし、本物の犯罪者にある子の中にあるのは怒りだけではなく、反社会的な考え方です。虐待を受けた子が非行を覚えることによって、周囲との力関係を逆転させ、自分をエンパワーメントさせていくことはよくありますが、本物の犯罪者になるためには、それに加えて“反社会的ネットワーク”が必要になります。だから、その

ネットワークを断つことが重要なんです」

非行少年がすべて成人後に悪の道に走るわけではないし、虐待を受けた子がすべて不幸な人生を送るわけでもない。家庭内の被虐待経験に加え、彼らの怒りや攻撃性を強化する「ネットワーク」が反社会的人格障害につながる、という斬新な講演だった。

このほか2日目には「学校と地域とネットワーク」「ドメスティック・バイオレンスと子ども虐待」「マスコミの役割を考える」「虐待死の定義を考える」など、医療・福祉・保健・法曹・教育の各専門職の領域を越えたテーマ別分科会が展開された。東京で、児童相談所と警察などのチームが介入したネグレクトのケースは、その立ち入り調査の様子を撮影したビデオが上映された。薬物依存症の母親と、小学生の子ども二人が暮らす家で、かなりの豪邸なのに、その中は病的なまでの荒れ方。「ネグレクト」がいかに大変な問題であるか、多くの人に感じさせたと思う。

今回の大会の実施主体は「栃木県小児虐待防止ネットワーク」。CAPNA 発足の1年前の1994年に設立されたネットワークで、大学関係者や児童相談所などの有志が熱心に活動してきた。大会の企画でも、参加する専門家や研究者の「縦割り分科会」とならないよう配慮したという。会場の狭さや座席の配置など、物理的な問題はあったものの、かなり工夫を凝らした大会だったと思う。ただ、CAPNAの参加者たちの話では、警察との連携のあり方、マスメディアの役割などについて、新しい問題提起があったものの、掘り下げた議論をする時間がとれなかったと



CAPNAのブースは盛況

いう。また、会場の問題から、市民団体の展示スペースが目立たず、来訪者が少なかったことは残念だった。いずれも今年のあいち大会につなげたい課題だ。

1999年は、子どもの虐待防止に中央官庁や国会の政治家たちが本腰を入れるようになった記念すべき年だった。大会直前にも衆議院青少年問題特別委員会が児童虐待防止法制定について議論するなど、すっかり社会問題になったことを感じさせた。

その意味でも、大会で決議された「宇都宮宣言」(別項)は、とてもタイムリーで、専門家集団から社会へのメッセージとして、大きな意義を持つと思う。

さて、あいち大会は、12月8、9日に、名古屋国際会議場(名古屋市熱田区白鳥)で開

催される。このほどCAPNAとさまざまな分野の関係者が実行委員会を結成し、県、市も一緒にタッグを組んで、企画立案や大会運営、動員などに積極的にかかわっていただくことになった。

あいち大会の実行委員会は、企画委員会と総務委員会に分かれており、これから4月ごろまでは企画委員会の仕事が忙しい。大会の重点目標や全体会、分科会の構成、人選などを土台づくりの作業だ。それができれば、参加申し込みの受け付け、抄録づくり、CAPNAの虐待死調査の本の出版、大会

ボランティアの募集、チーム編成、財務など膨大な事務仕事をこなして、当日に向かっていく。いずれにしても、CAPNAのような民間・草の根の組織がこれだけ大きな大会の事務局を担うのは、全国的にもほとんど例のないことだろう。多くの方々のご協力をぜひお願いしたい。

JaSPCAN本部事務局長の小林美智子さんによると「あいち大会」は、「もっと親睦や交流を目指した大会にしてほしい。参加者は3,000人以上が目標」とのこと。CAPNAは、必ずこの期待に応え、夢を実現させたい。

宇都宮宣言

日本子どもの虐待防止研究会は、一九九六年十月三十一日厚生省に児童福祉法改正に当たり児童虐待防止に関する要望をしたが、認められないまま、その後事態は極めて深刻化し、子どもの虐待は死亡例を含めて急速に増加している。

現在の緊急課題は、子どもの虐待防止に関わる法的整備と関連機関の充実にある。国会及び政府は、子どもの権利条約を遵守し、子どもの虐待防止のための制度の確立と実施について、本研究会等の市民団体及び関係諸機関や子どもを含む市民の意見を徴し、法制化については国民的合意を得るばかりでなく、児童相談所や児童福祉施設などの福祉機関や保健医療の充実を図らねばならない。また、あわせて虐待に苦しむ子どもの救済と家族への支援に関する積極的な手立てを速やかに行うべきである。

あなたに とどけ

CAPNAの電話相談室には、緊急の援助が必要なときに弁護士への連絡用に使う「危機介入通告依頼書」が備えられています。それを初めて書いたのは、ある性虐待の通報でした。記入する手が震えました。とてもつらく、悲しく、怒りが込み上げてきました。電話で聞いた少女の被害体験と心の裂き傷があまりにいたま

しかったからです。通報者から聞いた少女は、親への憎しみや怒り、自責の思いなどで、自暴自棄になっている状態だったようです。

それからしばらく眠られない夜が続きました。

危機介入をするのは正しいことだと分かっているのに、これからの親子分離、少女の心の葛藤、治療や新しい生活への不安などが、次々に頭に浮かんで来て、いろんなことを自問しました。

—通告依頼書の重さ— 尾崎仁美

何が大切なことなのが一少女を救うこと
救うってどうなること一少女が自分らしく暮らせること
自分らしく暮すって一笑顔で生きられること
笑顔で生きられるには一???
少女のこれからは一???

これ以上かかわりようもないのに、心へのしかかる危機介入通告依頼書の重さ。そんな思いを軽くしてくれたのは、専門職の方々の取り組みでした。夜、昼、休日を問わず、動き回った弁護士、ケースワーカー、施設の職員…。その経過報告を聞いて、私もネットワークの力によって救われていくのを感じました。

私にとっては、重大な危機介入の一点を担った生涯心に残る電話でした。電話相談が情報の最先端にあり、少女の人生を左右する重大な責務を受け持っているのだと心に留め、正確に冷静に受け取らなくてはと身を引き締めています。

少女のこと、これからもずっと、いつまでも「自分を大切に生きてね」と祈り続けています。



電話スタッフ養成講座

CAPNAでは、4月から第3回電話スタッフ養成講座を開講します。今後、ホットラインの相談態勢をさらに充実させていくため、質の高いスタッフの養成を目指しています。医療、福祉、保育、法律などさまざまな角度から、子どもの虐待をめぐる問題を勉強します。

研修期間 4月から来年4月までの第1、3木曜日と、隔月の第4木曜日（全30回）。
午後6時30分～8時30分。

主会場は、名古屋市中区丸の内、リバーパークビル。

募集定員 30人（22歳～55歳で、週に1日程度のボランティア活動ができる方）

受講料 30000円

応募締切 3月20日

請求先 住所、氏名を明記し、80円切手をはった返信用封筒を同封のうえ、CAPNA事務局まで「電話スタッフ応募資料希望」と書いてお送りください。また、2月24日午後5時30分から、名古屋市女性会館（中区大井町、地下鉄名城線「東別院」駅から徒歩5分）で、養成講座の説明会を開きます。

市民講座日程

○2月24日午後6時30分、名古屋市女性会館

講師 水戸加奈子（CAPNA研修委員・看護学校教員）

演題「援助されるということ」—子どもの持っている力と、そして子どもの求める援助について考えます。

○4月27日午後6時30分、名古屋市女性会館

講師 木村力央さん（NGO日本国際飢餓対策機構）

演題「カンボジアの子どもたち」—戦争、貧困、飢餓、混乱の中で生きる子どもたちの現状を勉強します。

CAPNAニュースレター13号

編集人 祖父江 文宏
1部 200円

発行 子どもの虐待防止ネットワーク・あいち

〒460-0002 名古屋市中区丸の内1-4-4-404
TEL 052(232)2880 FAX 052(232)2882



子どもを「かわいい」と思えない
カッとしてつい手を上げてしまう
虐待されている子が、近所にいる
虐待を受けた記憶に苦しんでいる
ほくは（私は）虐待を受けている
育児に疲れた。私はダメな母親だ

CAPNAホットラインをご利用ください

052-232-0624

平日 AM10～PM 4 研修を積んだスタッフが対応。
木曜日は東海市（0562-36-0624）でも受け付けます。